

フィールドワーク入門

フィールドワーク（ドイツ）講義ノート

Lecture Notes for Introduction to Fieldwork

岩田 晋典

IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskeiwata@gmail.com

1. フィールドワークって何？

フィールドワークとは何か。英語辞典では“field”には「野外、現場、現地」、 “work”には「仕事」という日本語が当てられている。この言葉が調査研究の文脈で用いられることを考慮にいと、フィールドワークは「野外などの現場・現地で行なう調査作業」ということになる。

ただしそれだけでは理解しづらいかもしれない。そういう場合は、“フィールドワークではない調査作業”と比較対照すると把握しやすくなる。たとえば屋内の実験設備を駆使してデータを集める研究は“laboratory work”と呼ぶことができよう。また、図書館や資料室での作業（library work）は屋内か野外にかかわらず全ての研究の基盤となるものだ。この作業は文字・印刷物を相手にする“book work”と言い換えてもよい。また今日の研究で無視することができないインターネット調査はさしづめ web work となるであろう。

フィールドワークは、こうした諸々の作業とは異なり、現場に赴いて直接見聞きする調査なのである。フィールドワークは文化人類学や社会学以外でも用いられる調査方法であり、植物学や地質学などの自然科学の分野でも活用されているし、地理学では「巡検」という名でフィールドワークが行われている。

2. フィールドワークのいろいろ

1. 訪問の回数

フィールドワークは多義的である。質的なものか量的なものかという違いもあるが、

ここではフィールドワークの役割に注目し、事前の準備や研究対象との関わりといった観点から次の5つに分類してみよう。

1) とくに準備はせずに現場に見学に行く行為

事前に予備知識を蓄えることは重視せずに、現場で見学する場合である。

2) 準備はするが、現場での確認に留まる

これは“視察”という言葉が合っているかもしれない。予備知識はあるとしても、現場で新たな発見を目指すというものではない。

3) 現場で得るもの(目的)を明確にしたデータ集め

一般に「調査」と言えば、このカテゴリー(あるいは4、5)に該当する。調査目的を明確に設定し、それに合わせた事前の準備(文献などを用いた基礎調査)をふまえた上で、現場でデータを集める行為である。またデータ収集を通じて考察自体が深まる効果があることも忘れてはならない。

4) 参与観察などの長期間の調査

3が長期に渡って行われる場合がある。たとえば文化人類学が重視する参与観察がそれだ。調査対象の人々と深く関わり、外部者としてその集団を観察するのではなく、“仲間”と認められることを通じて“内側の視点”から研究主題について考察することを目指す。

5) 4を通じ“自己”や“生”を知るための実践

文化人類学のフィールドワーク研究書などでしばしば強調されるものに調査者自身の内面の変化がある。4が調査対象と深く関わる調査方法であるとするれば、5は、それを通じて調査者自身が人間的に成長するという部分を重視する調査である。これは、調査がデータを集めるための単なる方法であるというレベルを超えてしまうものであるが、その一方で、こうした副次的効果は参与観察的な調査を経験した者であれば多くが認めるものでもあろう。人間的成長といったものは、一般的に言ってある程度の時間がかかるものであり、したがって期間が短いフィールドワークではあまり期待すべきではない。

国際フィールドワーク(ドイツ)では、3)現場で得るもの(目的)を明確にしたデータ集めを目指す。春学期に目的の設定、事前調査をし、夏季休暇中にドイツで現地調査を、そして秋学期に報告書(各レポート)の作成に当たるというスケジュールになる。

3. フィールドワークの長所と短所

どんな調査研究法にも長所と短所があり、フィールドワークも同様だ。それぞれを以下のようにまとめることができる。

<長所>

- 刺激的な、往々にして楽しい環境で調査できる
- 自分だけのオリジナルなデータを入手できる
- 現地の物事を、全体として総合的に理解できる（たとえばタテマエとホンネの両方、すなわち全体）
- 事前の思い込みや偏見に気付しやすい
- 現地の“普通”や“通常”を把握しやすい（cf. 事件・事故の調査報道やルポ）
- 問題発見に適している（何が論じるに足る問題かが現地で判明する）

<短所>

- 比較のお金がかかる（交通費、滞在費、飲食費…）
- 時間もかかる（調査準備、現地滞在、インフォーマントとのスケジュール調整…）
- 環境に左右されやすい（人間関係、自然条件、国際関係、⇔実験室…）
- 図書館で勉強するのと比べて多かれ少なかれリスクがある（病気、事故、犯罪、…）
- 性に合わない人もいる（人付き合い、体力、孤独感…）

短所の最後のもの、「性に合わない人もいる」という点には気をつけるべきであろう。フィールドワークという調査法には“人を選ぶ”という特徴がある。アンケートを送付し送り返されたものを集計するという調査法と比べると、フィールドワークには適応力、忍耐力、社交性など、そう簡単に身につけることができない性質・能力が必要となる。フィールドワークが成功するうえで、こうした向き不向きが持つ意味は大きい。もちろん、先に述べたようにフィールドワークが調査者を成長させるという側面はたしかにある。けれども、そういった成長の時間を待つことができない比較的短い調査の場合、フィールドワークを行なうか否かについてよく考えたほうがいい。国際フィールドワークでも同様である。

4. 国際フィールドワークとは？

国際フィールドワークを受講するには、国際コミュニケーション学部2年次以上で、かつ「フィールドワーク入門」を受講した者もしくは受講中の者でなければならない。国際フィールドワーク（ドイツ）の場合、前年度に受講を決定し、本年度春学期にゼミ形式で事前調査を行なう。夏季休暇中（例年9月）にドイツ・ベルリン市とその周辺にて現地調査を実施し、秋学期は各レポート（ならびにそのまとめとしての報告書）の作成に当てる。

上述のフィールドワークのさまざまな姿をふまえた上で、卒業研究やレポート作成のために行われるフィールドワーク像と比較すると、国際フィールドワークの特徴を次のようにまとめることができる。すなわち、短期開催の調査であること、かつ一回きりの調査であること（授業外で学生が自らフィールドに赴くことは考えにくい）、また、現地でことばが通じないこと（英語圏や韓国の場合は別の可能性あり）、さらに、基本的に集団行動であること、の4点である。国際フィールドワークは、たとえば自分の卒業研究のために数ヶ月地元で現場に通うというようなフィールドワークとは対極である。

国際フィールドワークに参加して現地でどのようなデータが集められるか、さらに言えばフィールドワーク中にどのような“海外経験”ができるかについては、こうした国際フィールドワークの特徴をよく頭に入れて、あまり期待し過ぎないことが望ましい。

5. 国際フィールドワーク（ドイツ）の概要

国際フィールドワーク（ドイツ）では、この授業を何よりもまず卒業研究などでフィールドワークを行なうための訓練と位置づけている。そして、現地調査を楽しく学ぶこと、ならびに世間に見せても恥ずかしくない形で報告書を作成することに重点を置いている。

報告書の内容は、各受講者のレポート、日々の行動の記録、聞き取り調査という3つのパートから成っている。

1) 受講者のレポート

受講者は各自テーマを見つけなければならない。学生の関心は多岐にわたり、たとえばこれまでアイスクリーム、ミュージアムショップ、衣服の寄付箱、博物館の展示、商店で見られる労働のあり方、ドラッグストア、見本市、バウハウス建築、化粧品など多種多様なテーマが扱われてきた。テーマを選ぶこと自体も学習の一部なので、学生がテーマ選びに苦労している場合は教員が指導をすることになる。

テーマ選びに関して学生に強調するのは、できるだけ具体的なもの、とくにモノを選ぶことだ。フィールドワークは慣れ仕事としての性格が強く、習得は一筋縄ではいかない。全くの初心者には2週間一回きり、しかも母語がほとんど通じない環境下でフィールドワークを有意義に経験してもらうには、調査対象が具体的であることが望ましい。

また、学生にはできるかぎりオリジナルなデータを集めることも要請している。ここでいうオリジナリティとは、「まだ誰も語っていないこと」を指す。価値のある情報を適切な形で世間一般に提供するという一連の実践、それを学生に教えることがいかに重要であるかは日々痛感しているが、まず第一に「価値がある」とはどんなことなのかから分かなければならない。そのためには「まだ誰も言っていない事実」を見つけさせることが最適である。国際フィールドワーク（ドイツ）では、ウェブに焦点を当て、その中で「いまだ語られていない事実」を見出すよう、学生を指導している。ドイツ滞在中でもその都度ウェブを参照するように学生を促している。

2) 日々の行動記録

この目的は、フィールドワークの日記のようなものとして自分たちがいつどこで何を行ったのか記録させることの他に、記録すること自体を体験させることにもある。自分たちの行動を、個々人の主観を超えて他人にも分かるようなかたちで、時間軸にそって網羅的に記録していくこと、それを体験させるのが大きな目的である。

3) 観光客への聞き取り調査

受講者の中に現地人と普通にコミュニケーションできるドイツ語力を持つ学生はまず存在しない。また聞き取りに十分な英語力を持つ学生も多くはない。つまり語学力からすれば聞き取り調査の実施は難しい。けれども、それでも学生に外国語を用いた聞き取り調査を体験させたいという考えから、国際フィールドワーク（ドイツ）では、英語の質問票を用いた聞き取り調査を行っている。

あらかじめ英語で作った質問文のリストを元に、中心部や観光地で観光客相手に聞き取りをさせる。観光客の多くは多かれ少なかれ英語を理解するので、学生が質問リストを用いるかぎり聞き取りが成立しないということはない。また観光客と学生それぞれの英語力次第で、聞き取りがアンケート的な構造的インタビューからある程度のフリートークも交えた半構造的なインタビューにまで発展することもある。

この聞き取りは受講者に2、3人のチームを組ませて、現地滞在中ほぼ毎日行なう。最初学生の多くは見知らぬ人に英語で話しかけることに躊躇するが、十数日間

のうちにじょじょに慣れ、最終的には聞き取りを楽しむようになる。

6. 国際フィールドワーク（ドイツ）の究極の目標

「国際フィールドワーク（ドイツ）の究極の目標は何か」と受講者や受講希望者に尋ねるようにしている。いまだ正解した者はいない。多くは「ドイツについて理解を深めること」や「良いレポートを書くこと」という、ある意味模範的な答えを出す。中には「ドイツに行くことで日本の良さを再認識すること」という回答もあり、国際教養に関する学部のスタッフとしてフクザツな思いをしたこともあった。

国際フィールドワーク（ドイツ）の究極の目標は、トラブルやアクシデント無しに帰国することである。期間中健康で過ごし、怪我にも窃盗にも巻き込まれず、遺跡などに自分の名前を書き込むこともなく、楽しく現地滞在を終えること、それが一番の目標である。

学生の多くはドイツが初めてで、海外旅行自体が初体験の者も少なくない。異文化に接する経験も浅く、「文化の違い」と言っても何が文化的な違いなのかさえ認識できない場合も多い。単に「日本よりも危険だから注意しろ」と言っても、何が危険なのかを察知する力も乏しい。そのためには、時間厳守からはじまって、街歩きの際は離れすぎないこと、ブランド品は身につけないことまで、こちらの指導に従ってもらう必要がある。

この点は学生に対して強調しなければならない。そして、従うことができないのであれば受講には適さないし、受講を認めることもできない。